発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内２－４－１
丸ノ内ビルデング７８１号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（212）4007・1447
編集責任者　岡沢憲芙
印刷所　関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）
1990年１月25日発行
第22巻　第１号
（毎月１回25日発行）
昭和44年12月23日第３種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol.22　No.1

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

新年の御挨拶

Message for the New Year

理事長　西村光夫
Chairman of the Board of Directors, Prof. Teruo Nishimura

明けましてお目出とうございます。みなさまには御機嫌麗しく新年を迎えられたことと、心よりお慶び申し上げます。年々同じようなことになりますが、当研究所も数え年二十五歳の青年となりました。もとより私共の不敏から、思うほどの活動も、発展も出来たとは申せませんが、日瑞両国間の文化交流のためのかけ橋として、両国によく知られる機関となり得ましたことは、まことに御同慶の至りであります。これ偏えにスウェーデン及びわが国の官民、とりわけ有形、無形の援助を惜しまれなかった会員のみなさま方の絶大な御支援によるものでありまして、ここに衷心より感謝申し上げる次第であります。

さて本研究所が設立されました昭和四十二年の頃は、所得倍増計画のかけ声に乗って、やっと上向きの動きを始めたばかりのときでありました。外は冷戦の深刻化、ベトナム戦争、中東の石油問題等厄介な問題に揺れており、日本の国策も甚だ腰の収まらぬ有様でありました。その中で、われわれは北欧の国々特にスウェーデンの特色ある歩み方に着目しました。その平和主義、国防への配慮、社会福祉政策の前進、労働政策、教育制度の改新等々どれをとっても、新しい日本の構築を考える上で参考とすべきものを含んでいるからであります。

日本人の関心は従来から大国にばかり向けられる傾向がありました。小国であるスウェーデンなどについては知識も理解も決して充分とは申せませんでした。ただ森と湖水の美しい国といった位の印象しかもっていないのが一般だったといえます。われわれは決してそうではない、小国ではあるけれども、国民を挙げて進歩と福祉の道を求め世界に先んじて、とにかく検討し実験してゆくという努力を立派にやってきた国がここにあるということを日本に紹介してゆくことだけでも意義のあることではないかと考えたのであります。

そうした意味からわれわれは、資料の作成、講演会、研究会、シンポジウム、現地視察団の派遣、スウェーデン語講習、人的の交流等々いろいろの方法をもって、あちらをこちらに、こちらをあちらに接近せしむべく努力を重ねて参りました。おかげをもって、十分とは申し得ませんがこの二十年余の努力はかなりの成果を挙げ得たのではないかと思っております。どうぞ皆様、これからも倍旧の御支援、御鞭撻をお願いして新年の御挨拶といたします。

目　次

新年の御挨拶……西村光夫…1
（謹賀新年）……松前重義…2
新「瑞暉亭」の贈呈式……小野寺百合子…2
ストレンミングとシル……石井新太郎…4
（研究会報告）川野秀之（オンブズマン制度）……5
SIPニュース……5
研究所の活動メモ（平成元年）……6

謹　賀　新　年

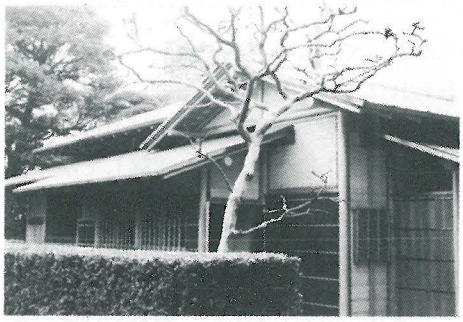
年頭に当り、皆様の御健祥をお祈り申し上げます。

会　長　　松　前　重　義
President, Dr. Shigeyoshi Matsumae

新「瑞暉亭」の贈呈式

Presentation of "Zuiki tei"

顧　問　　小野寺　百合子
Adviser, Mrs. Yuriko Onodera



新瑞暉亭茶室（王友荘庭園内）

平成元年12月４日、東京で新しい茶室瑞暉亭をスウェーデン国立民族博物館へ贈呈する式があった。贈呈は王子、十条、本州、神崎の製紙会社４社で、20年前にストックホルムで焼失した旧瑞暉亭に代って新しく寄贈されることになったのである。日本スウェーデン協会総裁の常陸宮両殿下と前総裁の秩父宮妃殿下のご臨席の下で、番町の王友荘の庭に仮に建った茶室は、日技神社の神主による神事のあと、霞友会館で盛大に贈呈されたのであった。

初代の瑞暉亭は1935年（昭和10年）、時の王子製紙社長で当時の日瑞協会副会長であった故藤原銀次郎氏がストックホルム民族博物館に寄贈したものである。私は1941年に渡瑞し、約５年間の滞在中この茶室がいかにスウェーデン人の親日感情の拠りどころであったかをよく知っている。瑞日協会々員の夫人たちは茶室庭園維持会を組織して植木屋の費用を拠出していた。私も夫人たちと何度も庭に通って華道感覚で木の剪定をしたものである。

藤原氏にこの茶室の寄附を決心させたのは、親日家のイーダ・トロッチク夫人と民族博物館々長リンドブロム博士とイェーテボルイ茶輸入商ルンドグレン氏たちスウェーデン人であって、是非ともストックホルムに本格的な茶室が欲しいと言い出し、駐瑞日本公使を介して国際連盟日本部へ申込んだのであった。

北欧の気候に向く茶室の選定を頼まれた藤原氏は適当なものが見当らないため自ら建築して寄贈することを決意したのである。三田の慶応大学敷地内に仮建築成った茶室を、当時の日瑞協会総裁の秩父宮殿下が「瑞暉亭」と命名された。茶室はそれから解体、梱包の上でスウェーデンへ海上輸送されたのだが、藤原氏は大工の棟梁と大工１人を同じ船に乗せて現地へ送り建築に当らせたのである。この２人が現地人の職人たちとともによく働いたことについては面白いエピソードが記録に残っている。ストックホルムの森の中、民族博物館の敷地内に立派に出来上った瑞暉亭の落成式には、時の皇太子（後の国王グスターフ６世）殿下と妃殿下がご列席になっている。

ところがこの茶室は1964年（昭和39年）不審火のために焼失してしまった。私はたまたま火事の数日後にストックホルムに着いたが、友だちや知人の誰彼からも残念無念をぶつけられて返す言葉がなく、その時の滞在中には焼跡を見る気にはな

れなかった。その後の訪瑞で焼跡を見たが、つくばいや石灯篭や見慣れた木々の残る姿に辛い思いをした。救われたのは、火事のときイーダ・トロッチク夫人もリンドブロム博士もすでに亡く、藤原氏も世を去った後であったことである。

今回の新瑞暉亭がストックホルムに建つことになった話の始まりは昭和63年10月ではなかったろうか。東京でスウェン・ヘディン展覧会が催されたとき、展示品の大部分を貸出したスウェーデン民族博物館の館長ウラ・ワグナー女史と副館長アンネ・ムレー女史が来日した。そのとき2人はスウェーデンでは焼けた瑞暉亭を何とか再建できないかとの要望が高いので、これからタロー・ガデリウス氏と相談するところだと語った。そして私はホテルで3人が話合いにはいるところを見届けたのであった。

新瑞暉亭広間の前にて
左より藤原夫人、磯野夫人、阿部夫人、筆者。
（平成1年12月4日）

タロー氏が王子製紙へ行ってスウェーデン側の意向を伝えた結果は、故藤原銀次郎氏の縁りの事業として、王子製紙を主体に前記関連会社3社が1億円を出し合って実現することに決まった。そこで4社の社長たちに駐日スウェーデン大使とタロー・ガデリウス氏と日瑞協会々長を加えて「瑞暉亭寄附実行委員会」が結成された。新茶室の設計は、茶室建築に関しては日本の第一人者である京都工芸繊維大学の中村昌生教授に依頼された。教授は日本の伝統を重んじ、藤原氏の茶道精神を継いで旧瑞暉亭の故事にならいながらも、現代感覚を以て異国に建つに相応しい茶室をということで大変苦心されたようである。

瑞暉亭再建が決定した由を秩父宮妃殿下にタロー氏が報告申上げたのは平成1年6月のことであった。スウェーデン側でも茶室受入れのためにチームが組織された。新茶室の実現に努力した人々、すなわち博物館長と副館長、故イーダ・トロッチクの孫娘ウメ・ラードブルクとガビー・ステンベルイ・コッホの姉妹のほか、瑞日基金関係のイベロート氏や駐瑞日本大使も名を連ねている。

平成1年12月4日の贈呈式には前記の姉妹が博物館を代表して来日し、ヘイマン駐日大使とともに受取る側として出席した。式のあと数日で茶室は解体され船積みのため梱包されるのであるが、輸送費と現地での建築費はすべてガデリウス株式会社が負担するということである。前例と異るのは日本の大工が資材と同行しないことである。今回は大工、佐官その他の職人10人が、資材の現地到着に合わせて空路日本を出発する手筈になっているという。半世紀という時代の変化を見る思いがする。新茶室の資材はすべて選びぬかれた純日本産の粋を集めたものであるが、建築の工程には最新の技術が存分に生かされているということである。

藤原銀次郎氏の娘、阿部喜美子夫人は、父君の寄贈当時の茶道具が火事でどうなったか、不足になったものがあれば補いたいと申し出た。博物館へ問合わせたところ茶道具一式は博物館に保管してあったので難を免れたと一品一品の写真を送ってよこした。また「それらは立派な品に違いないから特別の茶会にのみ大切に使用したい。できれば稽古用の普段使いの一式を頂戴したい。」という手紙がきた。阿部夫人は要望通りの一式を準備して、博物館代表の姉妹に托したのであった。

秩父宮妃殿下は瑞暉亭復活のお祝いに茶器10点を寄贈された。タロー・ガデリウス氏はこれらの茶器の輸送をも引受けたのである。

予定表によれば、ストックホルムにおける新瑞暉亭の落成式は平成2年5月25日となっている。

（掲載の写真2葉は、関西日本スウェーデン協会の大島高男事務局長提供）

ストレンミングとシル

Strömming och sill

スウェーデン大使館広報部　石　井　新太郎
Mr. Shintaro Ishii

ストックホルムの南部市街地区に、セーデルマルムがある。下町的な雰囲気を色濃く残し庶民階層の人々が多く住む所である。古い家屋も多く独特の町並みを形成している。そこにセーデルマンナガータンという通りがある。

かつてのストックホルムは旧市街のど真ん中に境界が有り、北はウップランド、南はセーデルマンランドに分割されていた。そのセーデルマンランドにちなんで命名されたこの通りはその昔、ロさがない連中にファッティグマンナガータン（貧乏人通り）と呼ばれたくらい貧しい人々の多く住んでいた通りだったらしい。今でも典型的な赤い塗料を塗られた木造の小さな鄙びた家が残っている。

あまり人通りのないこの道は、ほぼ南北に走り、北端はカタリナ教会の緑豊かな墓地の杜、南端はハンマルビーの競技場に至るしっとり落ち着いた静かな通りである。ストックホルムに住んでいた当時、今は無いが小さくてしゃれた古書店なども在って私の好きな散策路の一つであった。

その通りにくたびれた大衆食堂がある。白墨で書かれたある日のお昼のメニューに塩ニシン・ソテーの玉葱ソースの定食があり、私はつい食欲を掻き立てられどうしても食べたくなり中に飛び込んだ。薄暗い食堂の歴史の生き証人のようなテーブルに運ばれてきた白い皿の上の料理、ほくほくした馬鈴薯を添えてかりっと焼けたアイスランド産の塩漬けニシンがえらく塩辛かったのを今でも記憶している。

ニシンはスウェーデンでもポピュラーな大衆魚で大変良く日常の食卓に上る魚であるが海水塩分の濃淡により成魚の大きさが異なるらしく、北海で獲れる大型のものをシル、塩分の稀薄なバルト海で獲れるイワシ程の小型のものをストレンミングと呼んでいる。生ニシンについては魯山人は煮ても焼いてもそう旨いものではないと評していたそうだ。渡瑞した当初、安価だった事もあって生のストレンミングを自己流にフライなどにして食べていたが、やはり独特の臭みがあり、あまり旨いものとは思えなかった。ただ一度、スータレと呼ばれる薪の火で焼いたストレンミングをスカンセンで食べ、これは非常に美味であった記憶がある。

塩蔵したニシンは保存食として使用されてきた。リンドグレーンの作品にエミールの腕白話のシリーズがあるが、その中で普通、ユール（クリスマス）には日本のお正月のようにたっぷり色々な御馳走を取り揃えて堪能するのであるのにとても惨めなユールの食事として食べるものが塩漬けのニシンしかなかったというくだりがある。ところが、この塩ニシンは料理法によってはこれが同じ魚かと思われる程素敵な御馳走となるし、ユールの料理にも無論含まれる。その一つに様々な香料を使って酢漬けにする方法があり、実に色々な方法が発達していて、どれも味わいが深くユールの食卓を賑すものとなっている。

日本でも冷凍のニシンが簡単に手に入るのでその鱗と内臓を取って塩漬けにしておけば手軽に旨い本場の酢漬けニシンが作れる。塩漬けニシン2匹分を冷水に一昼夜ほど漬けて塩抜きしたものを2㎝幅ほどにぶつ切りにし、赤玉葱1ケと人参1本、ホースラディッシュと古しょうが少々を輪切りにしたものと順に重ね、オールスパイス、からしの種を夫々小さじに2杯づつとベイリーフ2枚を加える。ビネガー2.5dlに砂糖1dlを加えて一旦煮立たせた後室温迄冷ましたものを材料がかぶるくらい入れて2～3日漬けておくとガラス職人風酢漬けニシンができあがる。味が馴染むまでにはもう少し日数をおいたほうがよいようである。透明なガラス容器に入れれば見た目にも美しい。

それでは皆さん　Smaklig måltid !

研究会報告

政治問題研究会

テーマ　最近のオンブズマン制度研究動向
講　師　玉川大学助教授　　川野秀之氏

去る12月12日に、当研究所にて川野秀之先生の講話を中心に、オンブズマン制度に関する研究会が開催された。

講話は、この制度がまず1809年スウェーデンで発足して以来、世界の多数の国で設置された経緯とその内容の解説につづき、目下政治改革が重要課題となっているわが国のこの制度への対応上の問題点にふれられる等極めて注目すべき内容であって、参会者との間で熱心な応答が行われた。

〈SIPニュース〉

ウーロフ・パルメ賞、チェコ作家に

10月2日のウーロフ・パルメ（Olof Palme）記念基金委員会の発表によると、1989年のウーロフ・パルメ賞はチェコの作家ヴァクレーヴ・ヘーベル（Vaclav Havel）に与えられた。同基金の委員長でスウェーデンの外務大臣ステーン・アンデション（Sten Andersson）は、受賞者について次の様に語った――「ヴァクレーヴ・ヘーベルは真実と民主主義を守るために、首尾一貫した恐れを知らぬ努力を続けており、チェコだけにとどまらない、人権闘争における総帥である。有罪判決を受けて、彼が繰り返し投獄されたという事実にもかかわらず、ヘーベルの生命に対する人道全義的態度は不屈であり、彼の文学活動を通じて、我々は鼓舞されてきた。」

ヴァクレーヴは11月にストックホルムで行われる授賞式に招待されている。　（ＳＩＰ　360／89）

食品及び製薬のための生物学的試験法

技術開発庁（ＳＴＵ）発行の雑誌「スウェーデンの新技術」によると、ヨーテボリの生物工学関連の企業ディフチャンブ社（Diffchamb ＡＢ）が、製薬業界並びに食品加工業界における製品の殺菌管理を目的とする生物学的インディケーターを開発した。同装置は殺菌または低温滅菌された材料を監視するためのもので、多くの製品加工や熱処理加工に現在使用されている計器を用いた制御法の補足物として機能する。

ディフチャンブのバイオインディケーターは特定の微生物――例えばステロテルモフイルス（Bacillus Stearothermophilus）の生殖細胞――をカプセルに封じ込めた水性のゲル球である。表面殺菌され、生殖細胞のつまったゲル球は自動オートクレーブで消毒でき、各種の加工装置の使用を可能にするのに十分な機械的強度を有する。ゲル球は製薬もしくは食品と混ぜ合わされ、当該の殺菌もしくは低温滅菌工程で処理された後、無菌状態に分離されて栄養を含む溶液の中で培養される。

熱処理工程が不十分なことが判れば、生き残った微生物が24時間以内にゲル球を着色する。

バイオインディケーターを用いる利点の一つは工程での汚染のおそれが全くないことである。この方法はコスト効率がよく、安全迅速である。さらに、結果の解明が容易であり、継続的プロセスや回分法においても使用可能である。新バイオインディケーターは目下、特許を申請中である。（ＳＩＰ　335/89）

スウェーデンに本社を置くハイテク機械技術グループのアルファ・ラバル（Alfa-Laval）の発表によると、アルファ・ラバル（インド）——Alfa-Laval（India）——が此の程、インドとソ連の清算協約の下にソ連からの50のミルクの低温滅菌装置供給に関する総額8,000万クローナ（19億2,000万円）にのぼる契約を受注した。同社は、既に90の同様の装置、フルーツジュースの濃縮装置一式、化学及び工業利用向けの特別装置等を供給している。清算協約の下でのアルファ・ラバルのソ連への供給額は、目下、4億クローナ（96億円）を越えている。（ＳＩＰ　334／89）

上半期のボルボグループの売上、13％の増加

スウェーデン最大の工業グループであるボルボ（Volvo）の1988年度上半期の売上は457億6,000万クローナ（1兆982億4,000万円）であったが、本年度同期の売上は465億5,000万クローナ（1,117億2,000万円）であった。同グループ全体の売上は13％の増加を示した。財務項目を差し引いた後の収入は38億クローナ（912億円）から42億5,000万クローナ（1,020億円）に増加した。ただし、第2四半期のみでは昨年度の24億4,000万クローナ（585億6,000万円）から22億5,000万クローナ（540億円）に減少した。乗用車の売上は1,000台増の20万6,000台、トラック売上は2万8,700台から3万500台に増加した。

（ＳＩＰ　341／89）

研究所の活動メモ　平成元年

1.10　理事　松本重治先生ご逝去
23　常務理事会開催（新年度事業計画）
2.13　第68回スウェーデン語講習会開講
4. 5　顧問　高橋通敏先生ご逝去
7　岡村誠三、田畑米穂両理事　科学技術交流につき会談
27　スウェーデン社会研究所平成元年度通常理事会・総会開催
5. 8　第69回スウェーデン語講習会開講
政治問題研究会開催　講師、岡沢憲芙理事、テーマ、フリー・コミューン実験
18　アーサー・リンドベック博士の経済問題懇談会に出席
30　昭和63年度募集スウェーデン派遣研究員応募者の面接選考実施
6.23　教育問題研究会開催　講師、中嶋博顧問、テーマ、北欧における近時の教育改革の動向—学習社会の成立
28　日瑞基金平成元年度通常理事会、総会開催
9. 3　村角泰新駐瑞日本大使と西村理事長、外務省にて会談
5　日瑞基金理事　福井三郎京大名誉教授国際酵素工学賞受賞
9.25　第70回スウェーデン語講習会開講
10. 3　常務理事会開催（日瑞比較統計、在瑞日本企業名一覧）
10.12　松前重義会長の米寿祝にスウェーデン国王より祝電
24　西村理事長名古屋にて三宅重光理事と会談
11. 7　来日したストックホルム大学ヤン・エリック・グロイエル（Prof.　Jan Eric Gröjer）経済学部長と内藤英憲顧問面談
14　日瑞基金派遣研究員窪田敬一博士（東京大学）がカロリンスカ大学附属病院で、日本人として初の肝臓生体移植手術を担当実施
24　日瑞の科学技術関係共通問題検討会を開催
12. 1　野村豊前駐瑞大使の帰任歓迎会に西村理事長出席
スウェーデン大使館新報道官カローラ・タム（Mrs. Carola Tham）女史着任
9　スウェーデン国立クルベリー・バレー団来日興業開催に協力
12　政治問題研究会開催、講師　川野秀之玉川大学助教授、テーマ、最近各国のオンブズマン制度